

創刊の辞

| | |
|--------|---|
| 著者名(日) | 高杉 忠明 |
| 雑誌名 | 国際社会研究 |
| 巻 | 1 |
| ページ | 1-7 |
| 発行年 | 2010-10 |
| URL | http://id.nii.ac.jp/1092/00000530/ |

創刊の辞

高杉 忠明*

Message from the Director

TAKASUGI Tadaaki*

「言葉は世界をつなぐ平和の礎」という開学の理念の下、神田外語大学は1987年4月に開学した。当時、日本では土地の価格が高騰し、日本企業の国際進出や直接投資が急速に進むなどバブル経済が絶頂期を迎えていた。一方、世界に目を向ければ半世紀続いた冷戦が終結に向かい歴史が大きく動き始め、ヒト・モノ・カネ・情報が国境を越えて行き交うグローバル化の時代が始まろうとしていた。

こうした時代の要請を受け、神田外語大学は「広き世界を我が舞台」として活躍しうる人材の育成・輩出を目指して船出した。初代学長・小川芳男先生と2代目学長・井上和子先生の時代には、語学運用能力とコミュニケーション能力を兼ね備えた学生の教育に力が注がれ、外国語大学としての基盤が築かれた。確立された外国語教育の基盤の上になお一層の発展を遂げるには、「語学力+アルファ」、すなわち高い語学運用能力に加え深い国際的教養を備えた人材の育成が本学の次なる課題となった。

このような時に第3代学長に就任されたのが石井米雄先生だった。石井学長は、十数カ国語を自在に操る語学の達人であると同時に、世界的に著名な地域研究者（東南アジア地域研究ならびにタイ仏教研究の大家）であり、

* 神田外語大学国際社会研究所所長。神田外語大学英米語学科教授。Director, the Kanda Institute of Global and Area Studies (KIGAS); Professor, Department of English, Kanda University of International Studies.

1987年にはタイ王国から白象3等勲章を授与され、2000年には文化功労賞に顕彰、さらにユネスコ日本委員会委員長を歴任されるなど、まさに日本を代表する国際人であった。石井先生が学長に就任された1997年4月以降、神田外語大学は語学運用能力に加え、高い国際的教養を併せ持つ学生の育成に向け、新たな進化を開始した。それから約8年間、石井先生が人間文化研究機構長就任のため学長を辞される2004年まで、言葉と文化を一体化させた本学の語学教育と地域・国際研究は発展をとげ、教養教育の基礎も創られた。国際コミュニケーション学科と国際言語文化学科も新設され、地域・国際研究を専門とする教員も増員された。大学の統廃合が相次ぎ、縮小・閉校する大学も出てくる「大学冬の時代」にあっても、神田外語大学が大学のあるべき姿を模索できるのは、まさに先生の残されたご功績あればこそといえよう。

さらに石井学長の時代には、地域・国際研究を進める研究所の創設も囁かれるようになった。佐野隆治前理事長もその声に深い理解を示し、研究所創設を前向きに考えて下さった。同時に、地域・国際研究、社会科学、人文科学、自然科学を専門とする教員の間にも研究所創設への期待が高まっていった。研究所の創設はこの分野の教員にとって「夢」であり「悲願」であった。

赤澤正人・第4代学長の時代にその夢は現実のものとなる。2008年4月、佐野前理事長の英断により国際社会研究所はついに創設された。最初の1年間は、研究所の場所も決まらず、専任スタッフもいない中で活動が始まった。事務局関係者にはご心配をおかけしつつも、無我夢中、手探り状態の中で2年が過ぎた。この間、2008年アメリカ大統領選挙に共和党から出馬したマイク・ハッカビー氏の講演会(2008年6月)を皮切りに、これまで「教育・啓蒙活動」の一環として「Go Global! 外交官講演会シリーズ」(全4回)の開催、公開講座や講演会の開催、また「社会貢献活動」の一環として、千葉市民文化大学への講師派遣の協力、「子ども大学まくはり」の立ち上げ、さ

らには「国際人養成プロジェクト」の取り組みとして、在外公館派遣員試験対策講座の開設と実動、海外留学や大学院進学希望者のための勉強会の実施、そして言語研究分野とコミュニケーション研究分野の教員、ならびに英米語学科と異文化コミュニケーション研究所の多大な協力を得て、オバマ米大統領の演説を用いたレシテーション大会を実施した。加えて、「出版・啓蒙活動」として、地域・国際、総合文化、コミュニケーションの各研究分野に属する専任教員 22 名の共同執筆による『グローカリゼーション－国際社会の新潮流』（国際社会研究所編、神田外語大学出版局、2009 年 4 月）も刊行の運びとなった。2 年目には研究所の場所とスタッフも決まり、地域・国際研究分野や総合文化研究分野に所属する教員を中心に多くの人々の協力を得て、曲がりなりにも研究所活動の基礎が整った。お力添えを頂いた関係各位には心より感謝の意を表したい。

この度、研究所紀要『国際社会研究』創刊号を世に問うことができた。そして研究所の将来についてアドバイスを頂こうと考えていた矢先の本年 2 月 12 日、石井米雄先生がご逝去された。時まさにこの創刊号の誕生に向けて、鋭意編集作業に取り組んでいた最中の出来事であった。研究所は石井先生が学長時代に蒔かれた「小さな種子」が育まれ、形になって生まれたもので、とくにこの創刊号には、地域・国際研究にかけられた先生の「遺志」が生きていると感じる。この思いは本学教員の多くが共有するところのものだろう。この場をお借りし、謹んで石井米雄先生のご冥福をお祈り申し上げたい。

以下、研究所の取り組むべき課題と活動方針について述べる。

21 世紀の情報技術革命（IT 革命）とグローバル化、そして市場経済の世界的拡大の下、現在の国際社会は、ヒト・モノ・カネ・情報が瞬時に国境を超えて行き交い、世界の各地域・各国家間の相互依存が増大して、物理的にも精神的にも世界が一体化し、均質化してゆく状態が生じている。そのスピー

ドと規模は未曾有のレベルで展開している。しかしこうした均質化・共通化の流れに対抗して、自らの生活や文化が破壊され無秩序化するのを防ごうという理由から、民族的アイデンティティや伝統文化を守ろうとする動きが、ローカルなレベルから発せられる。グローバル化は、世界を一つにまとめ、人々の生活に大きなメリットをもたらす一方で、ナショナルなレベルやローカルなレベルから反発や抵抗を生み出す。現在の国際社会は、伝統的な国家関係だけでなく、このような「グローバル化」と「ローカル化」が同時併存しつつ、それぞれのアクターが共存対立している。こうした状況を「グローカル化」と呼ぶことができる。本研究所はこうした「グローカル化」する国際社会を対象に様々な角度から研究を進めてゆく。

グローバル化の進展は、人々に様々な情報を与え、多様な価値観や生活スタイルを生み出した。その結果、国際社会には伝統的な国家に加え、新たに国際組織や多国籍企業、そして人権擁護や環境保護に深く関わる市民社会組織(CSO: civic society organization)／非政府組織(NGO: non-governmental organization)が活動を展開するようになった。国際社会の諸問題に個人や小集団さえもが自らの価値観や信念に従って、主体的、積極的に関与できるようになったのだ。人々は伝統的な国家という枠にとらわれることなく、国境横断的な活動を展開するようになった。こうした一般市民や小集団の持つパワーはこれからの国際社会を動かしてゆく大きな要因となるだろう。それ故、当研究所は伝統的な国家間関係の研究に限定せず、地域研究、各地域間関係、そして国境横断的に広がる市民・小集団レベルでの活動など、現在の国際社会で生起する様々な現象を包括的に捉え、それらにフォーカスを当てて研究を進めてゆく。研究所の英語名称を Kanda Institute of Global and Area Studies (KIGAS) とした所以である。

幸い本学には「言語研究分野」、「コミュニケーション研究分野」、「総合文

化研究分野」、「地域・国際研究分野」の4つの研究分野を設け、様々な視点から研究と教育に取り組んでいる。本学の専任教員の構成を見ると、言語とコミュニケーションの研究を専門とする教員に加え、社会科学、人文・自然科学を専門とする教員の数もかなり多く、他の外国語大学と比べて質量共に充実している。研究所は本学教員が有する優れた知的資源を最大限に活用すべく、学科や研究分野の壁を越えて、その知的資源とパワーを融合させ、互いに協力して、知的ネットワークを構築し、特定の研究課題に取り組んでゆきたい。本研究所はそのダイナミズムを生み出してゆく拠点の一つであり、それを発展・拡大させてゆく大きな推進力となるものである。

加えて、本学には各々の専攻語を活かし、国際関係、国際ビジネス、国際協力の分野で活躍したいと考えている学生が数多く存在している。こうした高い語学運用能力と「やる気」を備えた学生を発掘・育成し、彼らをグローバル化する国際社会へと送り出し、そこで活躍できる人材を生み出してゆくことは、「時代を先導する外国語大学」として急務の課題である。研究所は、学内の関連組織と連携・協力を図りつつ、国際人養成プロジェクトや講演会、レシテーション大会の実施・運営、啓蒙書の出版をなどの諸活動を通じて、“Think global, act local”という「グローバル（glocal）な視点」を有する学生の育成に力を注いでゆきたい。

さらに千葉幕張の地において、地元千葉県の官庁や民間企業との知的ネットワークを構築し、「外国人労働者と多文化共生」など日本社会が直面する重要な課題の解決に積極的に取り組んでゆきたい。本学キャンパスのある千葉県には外国人労働者が数多く存在し、日本人との社会的共生が行政関係者の間でも深い関心が持たれている。グローバル化の流れの中で、国境を越えて日本に到来した外国人労働者が、日本社会に溶け込み、日本語を習得し、どのように日本人と共生して社会づくりに参加してゆくことができるのか？この創刊号の「特集」にも掲載されているように、「外国人労働者と多文化

共生」というグローバルな問題は、ナショナルなレベルに留まらずローカルなレベルでも重要な課題となっている。こうした問題を行政や民間企業と協力して、実態調査し、解決方法を模索する研究活動は本研究所の与えられた重要な使命であると考えます。

数年後には、現代の国際社会が抱える諸問題について、学内外の専門家と協力して研究を推進し、国内外の時代のニーズに合致した問題解決のための政策的提言を「神田外語大学幕張キャンパス」から世界に向けて、情報発信して行けるよう取り組んでいきたい。2010年4月に第5代学長に就任された酒井邦弥氏の下で、これらの課題に応じて働くことが研究所に与えられた重要な責務である。

今回刊行された『国際社会研究』創刊号は研究所のささやかな取り組みの結果であり、今後の研究所の進むべき方向を模索する過程で生み出されたものである。紀要のあり方や研究所のあるべき姿を含め、各方面からのご協力ならびに忌憚ないご意見・ご批判を賜れば幸甚である。

追記

本紀要表紙の絵は、国際言語文化学科の教員であり当研究所運営委員でもある飯島明子専任講師の作品である。ここに描かれた「陸地」は地域社会と国家、すなわち local と national な場を、そして陸と陸の間に広がる「海」は international な空間を、さらにはその上に広がる「空」は global な空間をイメージしたもので、これは「グローカル化」する現代の国際社会の特徴を象徴的に表している。波濤が舞い上がる様子は現在の国際社会が必ずしも安定し平穏であるわけではなく、対立・軋轢に満ちていることを物語っている。しかしそのような国際社会にあっても、我々は灯台から発せられる「一条の光」を手がかりに暗迷を破り、そこに進むべき方向を見い出してゆけるとの希望と確信が存在していることをこの表紙は示唆している。

この紀要が「一条の光」の役割を果たすことができれば、望外の歓びである。